

受け取ってもらわないと困ると懇願されたので、あとで返すつもりで受け取ったところ、開けてみたら現金。後日、野中さんの事務所を訪ね、丁寧な手紙を付けて返しました」

中村慶一郎氏も受け取りを否定する。

「私は75年から76年にかけて三木武夫内閣の首相秘書官を務め、00年から01年には森喜朗内閣の官房参与でした。政治評論家に官房機密費を配っていたのは事実です。リストのメモは秘書を辞める直前に見ました。自民党政権時代の悪習であり、恥部ですよ。森内閣を離れてから、内閣の職員から連絡があった。機密費を渡したいのだとピンときて、受け取るつもりはないので放っておいたら、その後、何の連絡もありませんでした」

田原氏は取材に「受け取るのが永田町の常識で、拒否するのは非常識」と語った。一方、「リストは怪文書のたぐい」と牽制した上で、「永田町の常識」に従

ったことを認めたのは俵孝太郎氏である。

「私はこの四半世紀、政府の様々な審議会委員を務めてきました。日当は1万3800円で、往復のタクシー代にもならない。政府としては私に苦勞をかけたと思っていたら、半分に一度ぐらいずつ官房長官などが数十万円を持って挨拶に来ることはありました。こういうお金をもらった

## 記者クラブにも機密費が

ていたのは私だけではない。それを否定するなら嘘だと思ふ。ただし、野中さんがいうような「益暮れに500万円ずつ」というのは野中氏が所属していた「経世会」の「マナー」だと思う。私は野中さんから何も頼まれたことはないし、お金をもらったこともない」

同じくリストにあった2名の評論家からは、期限内に回答を得られなかった。

影響力のある政治評論家に官房機密費が配布され、受け取った人間がいたことは確かだ。そして、リストに載った評論家には共通点がある。かつて大新聞の政治部記者で、記者クラブに所属していた人物が多くを占めているのだ。

実は、政治部記者に対しては、日常的に官房機密費が配られてきた歴史がある。たとえば官房長官と記者たちとのオフレコ会食の際、秘書が現金付きの手土産を記者に手渡す。あるいは、

が、「毒まんじゅう」を食らってきたからではないか。官房機密費は総額で約14億6000万円(09年度)。過去には外務省機密費からの「上納金」(※)があり、実際には官房機密費はもっと多かったが、日本の機密費は全体でも約80億円程度。先進各国と比べると、アメリカの約2・8兆円は別格としても、イギリス約460億円、ドイツ約390億円(外務省の01年調査による)と、日本は機密費の予算自体は少ない。

三宅氏が「誘拐された日本人の身代金を外務省の機密費から出すように、機密費は必要」、俵氏が「インテリジェンス(諜報)に使う機密費がなかったら国家とはいえない。野中発言は本来、墓場まで持つていく話」と語ったように、機密費は当然、必要であり、安全保障に深く関わる機密費

の使途を全て公開することもないと私も考える。

日本で問題なのは、メディア側の対応である。アメリカでも機密費を使った「スピン」(情報操作)が仕掛けられているが、メディアの側には警戒心が強く、「2ドルルール」「5ドルルール」などを設けている。政治権力からコーヒードなどを超える金品の提供を受けてはならない、という自主的なルールである。破ったジャーナリストは事実上、メディアから追放される。

一方、日本では長年、政治部の記者たちは官邸に「餌付け」され、「餌い慣らされ」てきた。そして彼らは退職後、政治評論家やコメンテーターとして新聞、テレビで活躍する。もう一度繰り返す。新聞、テレビが「野中発言」を黙殺するのは、「自己保身」のためなのではないか。

※外務省の機密費の一部が、官房機密費に転用されていた問題。外務省機密費流用事件は97年に本誌がスクープし、官邸への上納については、01年まで年間約20億円の機密費が上納されていた。岡田克也外相は今年2月、上納の事実を認めた上で、01年以降は行なわれていないと説明した

■機密費持ち逃げ 台湾の陳水扁前政権は、パプアニューギニアとの外交関係樹立のために準備した機密費約28億円を、台湾人仲介者の

の銀行口座(シンガポール)に振り込んだところ、持ち逃げされた。仲介者は現在、シンガポール高裁から返還を命じられている。

By The Way